超無欲魔法先生ニノら！？

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超無欲魔法先生ニノら！？

【Ｎコード】
Ｎ７０５２Ｔ

【作者名】
作者月詠

【あらすじ】
「なんでみんな、僕をみてくれないの・・・？」

――それは、密かな欲望だった――

「ネギはイタズラばっかりだが、ニノは大人しいな」
「そうだな。しかし・・・」

――それは確かな欲望だった――

「あ、何かでた！」
「兄さん！”まほー”は”イメージ”だってスタンおじいちゃんが言ってたよ！」
「そっか！ガンバロ、ニノ！」
「うん！」

――普通ならば、満たされているはずの欲望だった――

「魔力は普通・・・”英雄の息子”として失格だな」
「むしろ残りカスだろ？ハハハハハハ！！！」
（・・・・！）

――兄よりも、弟が理解していた事実・・・――

「『僕に』、『僕に』杖をくれたんだよ！あの父さんが！！」
「・・・・・そっか」

――成熟していない彼の心に、大きな輝が入る――

「『愛してるだろう』云々はいらない。僕はただ、『目の前で、両親二人に、直接、”愛してる”』って、言って欲しかった・・・！」
「・・・・・ッ！」

――その隙を埋めるかのように呼応する力――

「今は会いたいと思わない。会ったら、僕が我慢できそうに無いから」
『・・・・・』

――力はいつしか、約束となる――

「会うんだったら、とりあえず一発引っ叩く。そうしたらいいや」
『お前、とことん無欲だな』

――少年よ、欲望を抱いて突き進め！――

ドはじめに！

えー、この小説は「魔法先生ネギま！」の二次創作です。
キャラクター、及びストーリーに改変があります。
なお、この小説は「双子の弟は魔法仮面ライダー？」の完全リメイク作品です。
「何勝手なことしてんだよ！」や、「ふざけるな！」、「死ぬがよい」など罵らないでね？
作者の心は衝撃に弱いダイヤモンドの如く、豆腐のように恐ろしく崩れやすい心なので・・・
それでは、超無欲魔法先生ニノら！？・・・はじまります。

ｂｙ作者月詠

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

早速始まります！
ちなみに色々改変しております。

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

兄さんがまた何かやらかしたらしい。
兄さんにはとある願望がある

【英雄である父さんに会いたい】

村のみんなから聞かされてきた『英雄の父親』。
しかし、どうにもおかしい。
スタンおじいさんから無理を言って聞いた『母親』・・・
やはりというか、僕は母親似らしい。
双子なのに兄さんは赤毛、僕は金髪。
大体は予想が付いていた。

そして、一つの仮説が僕の中に現れた。

【村の大多数は兄さんを英雄に仕立て上げている】

スタンおじいさんの家で本を読んで、知識が成り立ってきた僕には
――――

――――兄さんを使った、父さんへの洗脳執着による人為的英雄の製造。

そうとしか、思えなかった。
その考えに、スタンおじいさんや僕と仲がいい年老いた村の住人達は否定派。
『ネギはネギ自身の道を行かせる派』である。
ここで、ちょっと前まで疑問に思っていたことがあった。

僕の名前が出てこないのは何故か？

無理も無かった。
僕は、スタンおじいさんの書庫で偶然見てしまった。
とある新聞記事・・・そこには――――――

――――――『ＭＭ元老院、厄災の魔女を処刑す』

そこには、鏡を見たような衝撃を受けた。
『厄災の魔女』と罵られた顔写真には、・・・・――――――

――――――僕と同じ顔の女性が映っていた。

間違いない。この人が母親だ、という確信と共に、まるで物語のようだ、と少々興奮染みた自分がいることに気づく。

推測では恐らく・・・

【犯罪者に仕立て上げられた母を、父が助け出し、結婚し、子が生まれ、兄さんと僕がいる】

これはもう推測ではなく、本当に物語のような人生(ものがたり)。
なるほど、確かに英雄譚だ。
どうせ、僕らをこの村に預けたのも母に対する厄介事や、その他諸々の事情があったに違いない。
そうでなくては納得がいかない。僕がいかせない。
幾ら厄介事があるとはいえ、たまに顔を出すくらいはするはずだ。
僕の考える親は
【どんなに離れていても、最低でも顔を出すくらいはする親バカ】。
白い目で見られたって構わない。僕だって親に会いたい。
父さんに肩車してもらいたい、母さんに抱きつきたい。
父さんと母さんと兄さん、そして僕の四人で、四人で手をつないで歩きたい。

でも、できない。

『ネギの方は正に”英雄の息子”らしい魔法量なんだがなぁ・・・』
『弟のニノの魔力は普通・・・”英雄の息子”として失格だな』
『むしろ残りカスだろ？ハハハハハハハ！！！』

「・・・っ！」

森の中で聞いた、男二人組の会話を思い出す。
否定せざるを得なかった。

しかし、それが故に、途方も無く悔しかった。
急いでそこを離れ、涙が出る目を拭いながら、必死でその場から逃げ出した。
認めたくない。けど、それが現実であった。
再び涙が込み上げてくる。

しばらくすると、スタンおじいさんが呼んでも返事が無かった僕を不審に思って書庫に入ってきた。
慌てて涙を拭い、平静を装う。
スタンおじいちゃんは、酷く驚いていた。

「・・・知ったのか」
「うん、村の皆が、どうして母さんの名前を、話題を出さなかったのか。僕に必要以上構ってこないのも・・・」
「っ！」

＃　＃　＃　＃

―スタンＳｉｄｅ

昔から聡い子じゃと思っとったが、こやつの頭は「一を聞いて十、百、千を知る」といったタイプじゃった。
ネギは「ピンチになればナギがくる」と信じて、自ら危険を起こし、自分を危険に晒しとる。
対してニノは大人しい、無気力を体現したようで、とても賢く、何度かネギの行為を妨げてきたが、度重なるネギの自虐行為に嫌気が差し、ネギが出かける度に村の人々に知らせ、自らはワシの所かバーにいる。

そしてニノは何時も通りワシの家の書庫で本を読み漁っている。
ワシはメシの時間のため、ニノを読んだが返事が返ってこず、様子を見に行って、ニノの手にした新聞の存在に気付く。
無くしたと思えば、ここに・・・
それを見て、こちらに振り返ったニノの顔は、急いで涙を拭ったように目の周りを赤くし、喜びと諦め、そして悔しさが入り混じったような複雑な表情(かお)をしておった。

「・・・知ったのか」
「うん、村の皆が、どうして母さんの名前を、話題を出さなかった

のか。僕に必要以上構ってこないのも・・・」
「っ！」

ワシはニノの言葉を聴いた途端、唐突に自分を殴りたくなった。
ここまで聡い子が、気付かないはずがない。
喜びは恐らく母親を知れたこと、諦めは・・・両親からの愛情か。
悔しさは何かは知らぬが・・・何かあったようだな。

その時じゃった。

――――コン→コン←コン→♪コココ・コン→コン↓コン←♪

・・・妙なリズムを刻むノックは…アイツか。噂をすればなんとやらか。

―Aパートend・・・

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

次回をお楽しみに！
それと感想をくれた『真っ白い布』さん、『矢車　想』さん有難う御座います！

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

連投でござる！連投でござる！
ちなみにタグに変化があったのはお気付きかな？
タグで推測するでござる！

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

――ネギSide

僕には双子の弟がいる。
似ても似つかない、双子の弟。
最初、物心付いた頃から、ずっと一緒だった。
弟のわからないところは僕が教えて、僕が辛いと思ったら弟が一生懸命支えてくれた。

ニノ・スプリングフィールド

それが、今僕のそばにいる唯一の家族。
従姉のネカネお姉ちゃんや、幼馴染のアーニャも一緒にいるけど、やっぱりニノが居ないと寂しい。
僕が「お父さんは僕らがピンチになったらきっと来る！」って言ったら、ニノは「たぶんそうだけど、お父さんは『立派な魔法使い』として、世界中の人を助けてるんでしょ？お父さんは一人なんだ。忙しくてお父さんが倒れちゃったら元も子もないよ」って言った。

ついカッとなってしまった僕は怒鳴ってしまい、ケンカになって、ニノはスタンおじいちゃんのところでお泊りしている。
そのあと、僕は悲しくなった。ニノが理解してくれないことじゃなくて、自分で解っていた『お父さんに会えない』というイライラを弟にぶつけてしまったこと自分に対して。

そのことをネカネお姉ちゃんに話した。
そしたらネカネお姉ちゃんは優しい笑顔で、「大丈夫、ニノもその内帰ってくるわ」と言った。

僕の中に疑問が生まれる。『その内っていつ？』、『どうして「一緒に迎えにいこう」って言ってくれないの？』、『じゃあ今度、ニノに謝ろうって言わないの？』と・・・

ずっと考えた。ずっと、ずっと。恐らく、それを考えていた僕はずっと上の空だったと思う。
もちろん、ネカネお姉ちゃんに心配されたし、アーニャには「しっかりしなさい！」って怒られた。
でも、誰も僕の周りでは、ニノの話しをする人は居なかった。

そんなある日だった。

僕がお散歩から帰ってくる途中だった。
とある木陰で、男の人二人が話し合っていた。

「しっかし、ネギのヤツはイタズラばっかりだな」
「そうだな。だが、それこそナギを彷彿とさせるな」

話の内容は、どうやら僕やお父さんの話らしい。

「ああ。でもよ、ネギはイタズラばっかりだが、ニノは大人しいな」
「おお、まるで正反対だ。まぁ、親と正反対の性格の子は珍しくも無いがな」

訂正、どうやら僕ら双子とお父さんの話のようだ。

「しかしよぉ・・・」
「ああ・・・」

二人の様子がおかしい・・・どうしたのだろうか？

「ネギの方は正に”英雄の息子”らしい魔法量なんだがなぁ・・・」

「弟のニノの魔力は普通・・・”英雄の息子”として失格だな」

「むしろ残りカスだろ？ハハハハハハ！！！」

（・・・！）

突然の、怒りが込み上げてきた。

こいつらに何がわかる？高々魔力の多さの違いじゃないか！

確かにお父さんは圧倒的な魔法量だったって聞いた。けど、それが僕の弟を侮辱することには繋がらない！

怒りの眼差しで、木陰から男の人二人を覗き見たとき、視界の影に金が映る。

あの輝くような金髪は、間違いなく弟の金髪で・・・その目には、涙が浮かんでいた。

・・・どうしようもなく、抑えようの無い怒りがどんどん込み上げてくる。

僕は石を投げた。

石は、大声で笑っていた男の人に当たった。

「って！・・・誰だ！」

「む・・・なんだ。ネギか。今のはイタズラが・・・ネギ？」

「・・・うとを・・・・・・」

「おいネギ、『ごめんなさい』は？」

「・・・・とうとを・・・・！」

「・・・ネギ？」

「弟を・・・ニノをバカにするな！！！」

「なっ！？」

「ネギ、まさか今の話を・・・」

「お前達がニノをバカにするな！！ニノは、ニノは、いっぱいスゴいこと知ってるんだ！僕にまほーのアドバイスしてくれたり、僕のまほーでわからないところを教えてくれたり、まほーのこと、たくさん知ってるんだ！ニノは覚えることが得意なんだ！僕に、カッコイイお話や、悲しいお話、おかしなお話に楽しいお話、いっぱい知ってるんだ！”えいゆうのむすこ”が何！？そんなの関係ない！『僕は僕』で、『ニノはニノ』だ！！ニノをバカにすることは僕が許さない！僕らは双子だ、兄弟じゃない。

『二人で一人』なんだ！！！」

僕は今までに無いくらい吼えた。
許せなかった。今、たった一人、唯一そばにいる『半身』をバカにされたから。
”えいゆうのむすこ”だなんて関係無い。今ここにいるのは、『”えいゆうのむすこ”のネギ・スプリングフィールド』じゃなくて、『ニノ・スプリングフィールドの双子の兄のネギ・スプリングフィールド』だ！！！

＃　＃　＃　＃

僕は、気が付いたら自分の家のベッドにいた。
アーニャの話だと、僕からスゴい勢いで魔力が出て、男の人二人は気絶。
それを感じ取ったネカネお姉ちゃんや、アーニャ達がやってきて、倒れている僕と男の人二人を見つけたらしい。
起きた僕から事情を聞いたネカネお姉ちゃんは「ゴメンね・・・ゴメンね・・・！」と泣きながら僕を抱きしめた。
少し気絶して、魔力もある程度戻って、体が動くようになった僕は、ニノがいるだろう…スタンさんのお家へ行くことにした。

――――コン→コン←コン→♪コココ・コン→コン↓コン←♪

僕だと判りやすい様に教えたノックの音が響く。

『ネギか・・・入りな』

スタンおじいちゃんの許可の声がした。

書庫の中に入ると、目の周りを赤くしたニノと、椅子に座ったスタンおじいちゃんがいた。

「兄さん・・・」

「ニノ・・・」

言わなきゃ、ごめんなさいって・・・！

「兄さん、あの・・・「ごめんなさい！」え？」

「あの時、ついカッとなって…ニノ、ごめんなさい！！」

僕は、首が床にぶつかるんじゃないかってぐらいに頭を下げる。

「・・・兄さん、もういいよ。もう・・・怒ってない」

「・・・ホント？」

「うん、ホント」

ニノの、諭すような声が僕に降りかかる。

顔を上げると、困ったような笑顔のニノがいた。

「まったく、兄さんは変な所で律儀なんだから・・・もう全然怒っ

てないのに」
「うっ・・・ごめん」
「ほら、また謝った」
「うぐぅ・・・（汗」

「「・・・ぷっ…あっはははは！！」」

凄く久しぶりだった。
ニノとこんなに笑い合ったのは。

「ははは・・・そうだ。兄さんに、大事な話があるんだ」
「え、何？」
「ニノ、お主まさか・・・」
「いつか知ることだと思うよ。だから、早いうちの方がいいでしょ？」
「う、うむ・・・」

ニノとスタンおじいちゃんが真剣な顔で話し合う。
なんだろう？

「兄さん、これから話すのは本当と推測が入り混じった話。よく聞いてね」
「う、うん」

それから、ニノの推測に、事実を教えてくれたスタンおじいちゃんの話は続いた。

僕の、母親のこと。
お父さんが幼い頃のこと。
”えいゆう”がどういうものか。
この村の大多数の望み。

そして、話し合いが終わった。

「そっか、じゃあお母さんとお父さんは生きてるんだ」
「うん、世界丸ごと救った反則臭い僕らのお父さんが、死ぬはずないよ」
「お前ら、なかなか言うな！」

笑い合いながらスタンおじいちゃんの家で晩ごはんを食べる僕ら。
僕は確かな希望を。
ニノはお父さんのことを軽い口調で言い、
スタンおじいちゃんがカッカッと笑う。

「で？魔法の練習はするんじゃろ？」
「もちろん！だって、ニノが一緒だもん」
「そうさ、だって僕らは・・・」

「「二人で一人の魔法使いだからね！」」

・第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とＢの絆／二人で一人の魔法使い

ｅｎｄ．．．

第一話　特殊願望であった兄と否定せざるを得ない弟とBの絆／二人で一人の魔

第一話、これにて終了でござる。
次回は少し飛んで村襲撃事件でござる。
ネギの明かされる謎？そしてニノ覚醒！？事態は急展開！超展開！！

ちなみに今回のサブタイの『B』は
『ブラザー（兄弟）のB』、『ボーイ（少年）のB』でござる。
ネギのノックの音はタトバコンボでござるよ～
ではでは、次回をお楽しみに～

第幼話　ニノと幼少期とS色々／検索結果表示（前書き）

設定ザマスw

第幼話　ニノと幼少期とS色々／検索結果表示

ニノ・スプリングフィールド

男

６歳

金髪非対称双眸

右：暗蒼、左：暗緑

（アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと瓜二つ）

・得意魔法

闇、火、氷

・スペック

属性：秩序・中庸

筋力：Ｄ

魔力：Ｃ

耐久：Ｅ

幸運：Ｄ－

敏捷：Ｃ

宝具（アーティファクト）：―

・スキル

英雄の息子：ＥＸ

・・・成長、修行次第で無限の可能性を秘めている能力。

直感：Ｂ＋

・・・戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。

普通の人間でこの直感は良い方と言える。

心眼（偽）：Ｂ
・・・直感・第六感による危険回避。

魔力放出：Ａ
・・・武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。スタン宅の書庫にて習得。しかし『戦いの歌』、『戦いの旋律』には劣る。いわば応急処置とも言える。

黄金律：Ｃ
・・・人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

カリスマ：Ｄ
・・・軍団を指揮する天性の才能。王族の末裔だけあって一応カリスマはある。しかし、現状況では効果が薄いようだ。

魔力操作：Ｂ＋
・・・魔力量の効率を操作して少ない魔力で上位古代魔法（ハイ・エンシェント）レベルの魔法が撃てる。この段階でニノは『魔法の矢』を３００発、例として『雷の斧』は６０発撃てる計算となる。（『雷の斧』１発＝『魔法の矢』５発計算）

スプリングフィールドの双子の弟の方。
金髪で、右は暗蒼、左は暗緑の非対称双眸。
厄介事は嫌いだが、兄相手にはツンデレ（笑
仕方なく付き合ってしまう。
最近ＰＣで日本のアニメに出てくる技術を魔法で出来ないか密かに

実験中だとか。

ちなみにネギのスペック

属性：混沌・善
筋力：E
魔力：A
耐久：E
幸運：C－
敏捷：D＋
宝具（アーティファクト）：―

・スキル
英雄の息子：EX
・・・成長、修行次第で無限の可能性を秘めている能力。

カリスマ：C＋
・・・軍団を指揮する天性の才能。王族の末裔だけあって一応カリスマはある。ネギの場合、ネームバリューも働いている。

魔力放出：A
・・・武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。第一話でその片鱗を見せる。

こんなもんですかね？
ネギの混沌の理由は、原作を知る方はわかるかと（笑
第一話～第二話時点での設定はこれにて。
ではでは～

第幼話　ニノと幼少期とS色々／検索結果表示（後書き）

ちなみに今回の『S』は
『詳細のS』、『正体のS』、『少年のS』、『その他のS』、『設定のS』
です！
日本語で読んでね！

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Aパート）（前書き）

第二話！そして連日連投でござる！
作者の妄想はまだまだ止まらないッスよ～～！！

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Aパート）

—ニノSide

僕ら双子の仲直りから数ヶ月。
あれから、兄さんの思いとネカネ姉さんの説得、村長の鶴の一声で
僕に対する陰の罵倒とかはなくなった。
無論、ネカネ姉さんやアーニャとの仲直りもした。
ネカネ姉さんが大号泣だったのは記憶に新しい。
ああ、そうそう。湖で面白いものを見つけたんだ。
『紫色系の九枚のメダル』を見つけたんだ。
絵柄が動物っぽいから図鑑で調べたら『恐竜』だったんだ。
なにかの記念メダルかな？
あ、あと・・・驚いたといえば……

～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「何？何か用なの？姉さん」
「・・・まさか」
読書中にネカネ姉さんに呼ばれ、兄さんと合流して、現在自宅。
・・・ってか、兄さんすっごい真面目な顔・・・・・・
「・・・そのまさかよ」

うわっ・・・姉さんもシリアス顔だ。

「つ、ついに・・・」
「ええ、ついに・・・・よ」

え？何？何この状況怖い。

「ニノ、実はね・・・ネギは・・・・」
「う、うん・・・・」

ごくりっ・・・・

「”おんなのこ”だったのよ！」

・・・・・・・

「は？」
「つまりあなたの兄は、兄じゃなくて姉、お姉ちゃんなのよ！」
「ま、まぁ・・・そういうことかな？」
「女の子じゃ襲われかねないでしょ？だからスタンおじいちゃんとの協力であなたの目と耳に認識阻害の魔法を掛けてネギを男の子に

してたのよ♪」
それは、アレですか？
男の娘ならぬ、男奈（おんな）の娘ってぇことですか？
・・・あれ？今僕何を思った！？

「つまり、ネギを『女』と認識する言葉を『男』となるよう自動変換する耳の認識阻害と、ネギの姿を『男』として映すようにする目の認識阻害を掛けたのだ！」

「え、ちょ、おま、は？はぁ？はぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああ！！！？？？？？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・・・ってなことがありまして…（汗

今では・・・

「さぁニノ！今日も張り切って魔法の特訓いくよっ！」
「姉さーん、今日の買い物当番だからね。今日はスコッチエッグとローストビーフだから、卵とひき肉よろしく頼むよ」

「あ、うん・・・じゃなくて！！」
「ああ、小麦粉も切れてたね。それもよろしく」
「うん。まかせて・・・って違う！！」
「デザートはウェルシュケーキだからね」
「わーい！やった・・・だーかーらー！！」
「わかったわかった。じゃあこの本を三週したらね」
「やった！・・・って長い！！」

「アンタ達、何してんのよ・・・（汗」

「特訓に誘ってるけどあしらわれてる・・・！」
「姉さんイジって楽しんでるのさ（笑」
「ニィィィノォォォォ・・・！！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」

なかなか楽しい―（笑）日常を送っております（笑
あと、ネカネ姉さんにネギ姉さんと同型色違いのノートパソコンを買ってもらいました。
「仲直り祝いよー♪」って。

なかなか平和な日常です。
こんな日々が、ずっと続くと・・・思っていました。

＃

＃

＃

＃

――湖の畔（ほとり）

「釣れないねー」

「まぁ、雰囲気だけでも春の陽気を楽しむとしようよ姉さん」

「そうだねー・・・はぁ～、ぽかぽかだねぇ～・・・」

「うん、ぽかぽかだ・・・」

「「ほぅ・・・♪」」

春の陽気を楽しみながら湖の畔でゆっくり休むのもなかなか良いね・・・

あ、そうだ。

「姉さん、今日はネカネ姉さんが帰ってくる日じゃなかった？」

「・・・・・」

「・・・・・」

「あ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！忘れてた！！」
（忘れられてるよ、ネカネ姉さん・・・（汗）
「い、急いで戻るよニノ！」
「諒解だよ姉さん」

せっせせっせと村へ戻る姉さんと僕。
しかし、状況は一変する。

―――ブワッ！
「「！？」」

僕たちが見た光景・・・それは、僕らの村が轟々と燃える様子だった。

―Ａパートｅｎｄ

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Aパート）（後書き）

ついに起こる村襲撃事件。
果たして、ネギとニノの命運は如何に！？

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Bパート）（前書き）

後編でござる！

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Bパート）

―三人称Ｓｉｄｅ

轟々と燃え盛る村。
その光景は、少女と少年の心に無慈悲な理解を押し付けた。

「うそ・・・うそ、うそ！何？何が起きて・・・！」
「落ち着いて姉さん！混乱してる場合じゃないよ！！」

混乱に陥るネギを、ニノがネギの肩を揺すって宥める。
なんとか混乱から覚めるネギだったが、顔色が悪い。

「僕らの『戦いの歌』や『戦いの旋律』は未完成だ。魔力放出で体を強化して、二手に分かれてスタンおじいさんかネカネ姉さんを探そう」
「・・・っ、う、うん」

二人はオーラのようなもの…自らの魔力を纏い、身体能力を強化する。
二人は別方向に別れ、親しい者を捜しに行った。

―ニノＳｉｄｅ

燃え盛る村の熱気が僕を襲う。

だが、魔力放出による身体強化で擬似的な『感卦法(かんかほう)』・・・『気と魔力の合一』とほぼ同出力の身体能力を得ている。
しかし、行く先々で、見覚えのある村の人々が『石像』と化している姿は、見るに耐えなかった。

そこに、一つの願望・・・いや、欲望が僕の中に生まれた。

―――村を助けたい！

その時だった。
ポーチの中に入っていた、九枚の紫のメダルが魔力と光を放ちながら僕の周囲を回転する。
まるで、何かに呼応するように光と魔力が胎動している。

思わずそこで立ち止まってしまう。
すると周囲が召喚されたであろう悪魔が取り囲む。

そして、メダルが最高潮まで呼応した。

《プテラ！ッ》
《トリケラッッ！》
《ティラノッッッ！》

パープルのメダルが・・・
レッドパープルのメダルが・・・

ブルーパープルのメダルが・・・
三枚ずつ回転し、縦に並び、大きな三枚が重なり、さらに大きな一枚となる。

《プ・ト・ティラーノ・ザウルースッ！》

大きな紫の、三体の恐竜の意匠を施した魔方陣がニノへと被さる。
抜けた後のニノの姿は、全くといっていいほど変化していた。

頭には紫のプテラノドンの意匠のヘッドセット。
金の髪の毛先には紫が入り、暗蒼と暗緑の双眸はエメラルドグリーンへと変わっている。

肩にはトリケラトプスの双角のような黄金の突起、そして強固で紫に輝くボディーアーマー。
胸には大きな円があり、上から『紫のプテラ』、『赤紫のトリケラ』、『青紫のティラノ』が描かれている。
背中には大きな逆直角三角形が二枚、翼をたたむように存在しており、腰周りには鎧のような何重にも重なった装甲がある。

脚には、大きな紫色のメタルブーツと化した靴があり、膝にも繋がるように装甲が在る。
全体的に、胸の大きな円に繋がるように脚、腕、首に大きな円への紫のラインが入っている。

アーマー以外の部分は、白いレザー風の服で覆われている。

『・・・ッヴァァァァァアアッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！』

紫色の『ソレ』から、咆哮が走り、凄まじく溢れ出す魔力が極低温の冷気となって周囲を凍らせていく。
村を包む炎を、周囲に群がる悪魔の一部を・・・氷像へと変貌させた。

『ナ、ナンダ・・・コンナ奴、見タコトモナイゾ！』
『ダガシカシ、奴ハ一人ダ！臆スルナ、総員カカレェー！！』

悪魔のほとんどが紫色の『ソレ』へと向かう。
しかし、紫色の『ソレ』はそれを臆する事無く腰周りに付く何重にも重なった装甲を重ね合わせ、大きな尾・・・『テイルディバイダー』が飛びかかってきた悪魔達を薙ぎ払う。

すると今度は魔力を手に集め、上空へと放った。

―ニノ式応用魔法・『魔法の矢　拡散　雷の３００矢』！！

悪魔達に雨のように降りかかる『魔法の矢』を放った紫色の『ソレ』は周囲からほとんど消えた悪魔を確認する。

『グッ・・・タダ闇雲ニ襲イカカッテモダメダ！連携デイクゾ！』
『オウ！』

生き残った五体の悪魔が、紫色の『ソレ』の前で順に襲い掛かる。
だが・・・それも無駄とわかる。

《スキャニング・チャージッッ！！！》

紫色の『ソレ』が拳を叩き合わせると、不可解な機械音声が流れる。
すると、大きな円に描かれた三体の恐竜の意匠が輝く。

肩の黄金の突起・・・『ワインドスティンガー』が鋭く伸びて、襲い掛かる悪魔全てを串刺しにする。
そして展開された翼・・・『エクスターナルフィン』から放たれる羽ばたきが冷気の風を呼び、五体の悪魔を氷像へと変貌させる。
そして、再び『テイルディバイダー』を発動させ、氷像と化した悪魔五体を砕く。

紫色の『ソレ』の周囲に悪魔が居なくなるのを『ソレ』が確認すると、溜息をつく。

『何なんだろうか、この力』
《今は後にしておけ。お前の姉の所へ向かうぞ》

『絶対に後で説明してくれ。でなきゃ不安過ぎて困る』
《はいはい》

そのときだった。
紫色の『ソレ』の後方の方で大きな音がした。

『何だろう？』
《さぁな。あの辺に居るんじゃないか？》
『っ！姉さん！！』
《あ、こら！》

紫色の『ソレ』は『エクスターナルフィン』を展開して、音のあった方向へ飛び去る。

＃　＃　＃　＃

既にお気付きかもしれないが、紫色の『ソレ』・・・それは僕、ニノ・スプリングフィールドが拾った記念メダル・・・ではなく、魔力と恐竜の力が込められたマジックアイテム『コアメダル』の力で変身？装着？した姿。『プトティラ』だそうです。

先ほどの大きな音のほうへ行ったら、ネギ姉さんをそのまま大きくしたような男性が居ました。
無論、この人が・・・

『貴方が、僕の父親なんですね・・・』
「・・・？　もしかしてお前がニノか？」

僕の確信めいた声に、父親・・・『ナギ・スプリングフィールド』らしき男が疑問を僕にぶつける。
まぁ、ぶっちゃけちゃうとこの姿だとわかりにくいね。しかし襲われている途中だから黙認して欲しい。

『うん。そうだよ・・・父さん』
「まぁ・・・その、何だ。個性的…？な格好だな」
『一応真面目なのでそう言わないでよ（汗』

悪い悪い、と軽い感じで言う父さん。

『とにかく今は姉さんの方に行かないと』
「そうだな」

僕は再び『エクスターナルフィン』を展開、父さんは浮かんでネギ姉さんの方へ飛ぶ。

＃　＃　＃　＃

ネギ姉さんの場所へ辿り着くと、石になったスタンおじいさんと、脚が石になって崩れ、虫の息で倒れているネカネ姉さん、そして、そのそばで泣くネギ姉さんがいた。

『姉さん！』
「ニノ…ニノなの？」
『ちょっと姿が違うけどね。少し飛ぶよ』
「う、うん」

僕が姉さんを、父さんがネカネ姉さんを横抱きで再び飛ぶ。
僕は横目に、石像にされたスタンおじいさんを見て、再び飛び去るのだった。

――村近くの小高い丘。

ネカネ姉さんを寝かせ、僕は変身を解く。
僕が姉さんを降ろすと、姉さんは子供用の小さい杖を父さんに向け、キッとキツい眼差しで父さんを見る。

「お前・・・そうか、お前がネギか」

父さんが完全に気付いた。
しかし、姉さんは警戒を解かない。

「お姉ちゃんを、守ってるつもりか？」

父さんはそう言いながら、姉さんに近付く。
姉さんはぎゅっと、目を瞑ってしまう。
だが・・・

「・・・大きくなったな」

姉さんの頭を、父さんはわしわしと撫でる。
・・・はぁ。

「何をしているので？　まったく、父親が娘を怖がらせない」

―シパンッ！

「はぷっ」

「！？」

とうとう我慢しきれなくなった僕は父さんの頭を平手で引っ叩く。

「今まで何処行っていたので？」

―スパンッ！

「ろもっ」

二発目。

「連絡も無しに、本当に何処へ？」

―シュパンッ！シュコーンッ！

「かぺっ、ふみゅっ」

三発目、四発目。

「連絡の一つくらい出しては如何なんですか？」

―パパパンッ！

「ごもろっ！」

三連・・・五発目、六発目、七発目

「ふぅ・・・ねぇ？」

「は、はい・・・」

「・・・・・（汗」

僕は殴り終えて満足。
父さん、色々満身創痍。
姉さん呆然。

何だろうか、この状況・・・（笑

「今回はこれで許します。姉さん、ちょっと・・・」

「え、あ、うん」

とりあえず姉さんをそばに寄せて、姉さんの右手の小指と父さんの小指を組み合わせ、僕の左手の小指を父さんの左手の小指と組み合

わせる。

「父さん、絶対の約束です。僕ら双子は、必ず貴方に追い付き、追い越してみせる。そして、年に一度は連絡を寄こすこと。良いですね？」

「・・・ああ。わかった。約束しよう」

「姉さんも、良いですね？」

「・・・うん。うん、うん、うん！」

「では・・・」

「「「ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたら「『千の雷』、『燃える天空』、『魔法の矢　五千発』、その他諸々でぶっとばーす♪」「「・・・・え？」」「ゆーびきった！♪」「「えええええええええええええええええええええええっっっ！！！！！！！！！！！！！」」」

うん？何か？

「ちょ、ちょっとニノ！それは洒落にならないよ！」

「わ、我が息子ながら恐ろしい考えを・・・いや、これはアリカに似たのか・・・？」

「でもこうすれば、逆に印象がついて約束は忘れないだろう？」

「「た、確かに・・・」」

さて、そろそろかな？

「・・・っと、そろそろマズいか」

「お父さん・・・？」
「お、そうだ。　ネギ、お前に・・・」
父さんが渡したのは、自分の大きな杖だった。
「この杖をやろう。俺の形見・・・いや、約束の証だ」
「・・・あうっ」
受け取る姉さんだったが、既に魔力放出は切っており、父さんの大きな杖を持ってよろけてしまう」
「ハハハ。重すぎたか。　・・・もう時間がない」
「え？」
「・・・・・」
「ネカネは大丈夫だ。石化は止めておいた。あとはゆっくり治してもらえ」
父さんはそう言うと、空へ飛び上がる。
「悪(わり)いな。お前らに何もしてやれなくて」
「何を言って・・・約束したでしょう。それに、お二人に伝言があります」
「おう、何だ？」
「『二人とも、大好きです。愛してる。無論、双子二人揃って』と・・・」
「・・・ああ。伝えておく。二人とも、俺が言えた義理じゃないが、元気に育てよ」
「「・・・・もちろん！」」
「返事も元気で結構！じゃあ、幸せにな！」
「「うん！」」

そして、父さんは去っていった。
さて、『コイツ』のことをネカネ姉さんやネギ姉さんに説明しないと・・・だね。

―第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣
end・・・

第二話　衝撃の事実と村襲撃とTの出現？／暴君出陣（Bパート）（後書き）

さてさて、第二話はこれにて閉幕。
次回も少し飛んで、メルディアナ魔法学校での話でござる。
原作とは違い、勉強のみに没頭する事無く、普通の魔法学生としての日常を送るネギ。ニノは授業の最中、さらなる魔力効率の研究、ＮＰＣで見た日本のアニメの魔法での再現を目指す。
そして明かされる、『紫のコアメダル』の真実・・・
事態はさらに加速する！

ちなみに今回の『Ｔ』は
『父親のＴ』、『Ｔｅａｒｅｒ（嵐）のＴ』、『Ｔｉｔａｎ（タイタン＝大力無双の人）のＴ』
となっているのだよ！
ではでは、次回をお楽しみに～

第少話　ニノと少年期とMたくさん／検索結果表示（前書き）

設定、更新でござる。

第少話　ニノと少年期とMたくさん／検索結果表示

【第二話以降～第三話】
ニノ・スプリングフィールド

男
６歳
金髪（毛先：紫）非対称双眸
右：暗蒼、左：暗緑
（アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと瓜二つ）

・得意魔法
闇、火、氷

・スペック［ＮＥＷ！］
属性：秩序・中庸
筋力：Ｄ→Ｂ＋
魔力：Ｃ→Ａ＋
耐久：Ｅ→Ｂ－
幸運：Ｄ－→Ｃ
敏捷：Ｃ→Ｂ－
宝具（アーティファクト）：Ａ＋＋

・スキル［ＮＥＷ！］
英雄の息子：ＥＸ
・・・成長、修行次第で無限の可能性を秘めている能力。

［ＮＥＷ！］古代の暴君：ＥＸ
・・・紫のコアメダルを取り込んだことでパラメーターが一部上昇。

力を解放することで魔道式鎧『プトティラ』を装着可能とする。（しかし、それに値する欲望のエネルギーがないと失われる）

［ＮＥＷ！］直感：Ｂ＋→Ａ

・・・戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。これは無論、プトティラの影響である。

心眼（偽）：Ｂ

・・・直感・第六感による危険回避。

［ＮＥＷ！］魔力放出：Ａ→Ａ＋

・・・武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。スタン宅の書庫にて習得。しかし『戦いの歌』、『戦いの旋律』には劣る。いわば応急処置とも言える。

黄金律：Ｃ

・・・人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

［ＮＥＷ！］カリスマ：Ｄ→Ｃ＋

・・・軍団を指揮する天性の才能。王族の末裔だけあって一応カリスマはある。ネギとの和解や、プトティラの影響によるものと考えられる。

［ＮＥＷ！］魔力操作：Ｂ＋→Ａ

・・・魔力量の効率を操作して少ない魔力で上位古代魔法（ハイ・エンシェント）レベルの魔法が撃てる。この段階でニノは『魔法の矢』を３００発、例として『雷の斧』は６０発撃てる計算となる。（『雷の斧』１発＝『魔法の矢』５発計算）プトティラの影響、そして当人の研究により向上。

・宝具（アーティファクト）・マジックアイテム［ＮＥＷ！］
＊『ムラサキノコアメダル（紫のコアメダル）』
・・・三体の恐竜『プテラ』、『トリケラ』、『ティラノ』の力を三枚ずつ封じ込めた九枚のメダル。現在はニノの体の中に取り込まれている。コアメダルのエネルギーを解放することで魔道式鎧『プトティラ』を装着できる。
ランク：Ａ＋＋　種別：対人宝具　レンジ：―　最大捕捉：１人

＊『古代（プトティラ）の暴君の鎧』
・・・コアメダルに内包された欲望と恐竜の力で出来た『分類上』魔道式鎧。担い手に左右されるが、唯一無二、絶対無双の力を誇る。
ランク：ＥＸ　種別：対人宝具　レンジ：―　最大補足：１人

＊『絶対無双の斧竜の顎』《メダガブリュー》
・・・地面や壁、物質のある空間から何処でも取り出せる身の丈以上の巨大な黒紫の戦斧。
ランク：Ａ＋　種別：対人・対軍宝具　レンジ：２～５　最大補足：１０人

＊『絶対無双の砲竜の喉』《メダガブリュー》
・・・メダガブリューにコアメダルを１枚から６枚まで入れて、変形させた姿。ガンモードとバズーカモードの二種類がある。
ランク：Ａ＋　種別：対人・対軍・対城宝具　レンジ：２～９９
最大補足：４００人

スプリングフィールドの双子の弟の方。
金髪で、右は暗蒼、左は暗緑の非対称双眸。

厄介事は嫌いだが、兄相手にはツンデレ（笑
仕方なく付き合ってしまう。
最近ＰＣで日本のアニメに出てくる技術を魔法で出来ないか密かに
実験中だとか。
現在『ＦＦ：Ｕ』のソイルを魔法で再現できないか模索中。

・本編使用のニノの技、魔法［ＮＥＷ！］
［ＮＥＷ！］＊『魔法の矢　拡散　雷の３００矢』
・・・集束状態の『魔法の矢』を遅延魔法で連弾に術式を変更する
応用魔法。遅延魔法は時限式なので対軍の場合は５秒から１０秒、
対人の場合は３秒から４秒半がベストらしい。
（初登場：第二話Ｂパート）

※似合うと思うＢＧＭ
士の決意　：ディケイド
究極のメモリ　：Ｗ
Ａｃｔｉｏｎ！！　：カブト
サソード　：カブト
クライマックスＥ　：５５５
鍛えて、鍛えて！　：響鬼
デネビックバスター：電王
ドッガフォーム　：キバ
パッション　：ＯＯＯ

第少話　ニノと少年期とMたくさん／検索結果表示（後書き）

なんというプトティラ無双・・・としか言いようがない。

ちなみに今回の『M』は
『ミュージックのM』、『魔法のM』、『無双のM』、『メダルのM』、『模索のM』で、あ～る！
ではでは、次回をお楽しみに～

第欲話　説明と右腕とGの証／姉さん・・・僕は人間をやめたようです（前書き

うう、数日遅れた・・・
今回は新しい試みがあります。
参考ヒントは『ＴＦ』、『ＢＷ』です！

第欲話　説明と右腕とGの証／姉さん・・・僕は人間をやめたようです

これは・・・村襲撃から数日。
『正義の味方（笑）』、『立派な魔法使い（笑）』の説得に成功し
てしばらくの事・・・

「さて、ニノよ。そろそろ『そやつ』のことを教えてもらおうか」

僕の周囲には
お爺様ことメルディアナ魔法学校校長
僕の父さんの知り合いこと『タカミチ・T・高畑』
実姉ことネギ・スプリングフィールド
幼馴染ことアーニャ

そして・・・

「実は・・・僕もよくは知らないんだ」
「何・・・？」
『構わない。丁度これから説明する』

浮遊する鋭い紫の右腕こと『グリードのギル』

『俺はグリードのギル。こいつ――ああ、ニノのことだ――の持つ
マジックアイテム…『コアメダル』の化身とでも言っておくか』
「コアメダル・・・とは？」

ギルの言葉に高畑が問いを投げる。

『そうだな。おれ自身のことしか知らんが、動物、昆虫、事象の力と欲望のエネルギーが凝縮されたマジックアイテムだ。俺が知ってるだけで、七種類のコアメダルが存在する』

「欲望のエネルギー？」

「つまりは・・・僕があの時願った『村を救いたい』という願望が欲望になって、それが欲望のエネルギーって事？」

『そうだニノ。なかなか聡いな…上出来だ！』

「そ、そう？」

て、照れるな・・・

『さて、種類は・・・

鳥

昆虫

猫

重量――犀とか象とかのな――

水生生物

爬虫類

そして、俺の恐竜だ』

ギルの手からチャリ…という音がすると、紫、赤紫、青紫のメダルがあった。

『俺のコアは『プテラ』、『トリケラ』、『ティラノ』。これが三枚ずつ・・・合計九枚に、セルメダルと呼ばれる銀のメダルで、俺達グリードは構成されている』

「あの、セルメダルって何？」

今度は姉さんの疑問だ。

『そうだな・・・棒アイスってのがあるだろ？』

「うん」

『棒がコア、アイスがセルってことだ。もっと解りやすくすれば、人間の臓器や骨はコア、筋肉や皮膚がセルってわけだ』

「へぇ・・・」

思った以上に解りやすいね・・・

「そしたら、グリードというのは？」

『言ってみりゃあ、種族名だな。欲望の怪人グリード・・・俺達は８００年前の人間に生み出された。

個体ごとに９枚――３種×３枚――のコアメダルを核、大量のセルメダルを細胞として構成された、人間の「欲望」を糧に力を増大させる種族でな。

８００年前に１０枚作られたコアから１枚を抜き取り、『９』という「欠けた」数字にした結果「足りないが故に満たしたい」という欲望が生まれ、その欲望が進化して自律意志を持ちメダルを肉体として誕生した・・・と俺は記憶している』

高畑の問いに、ギルが答える。

足りないが故の欲望・・・か。

『本当は俺も人の形で構成されるはずだったんだが・・・』

「だが・・・何よ？」

言い淀むギルにアーニャが問い質す。

『ニノが後生大事に持ちながら欲望を持つもんだから、こいつにほとんどのエネルギー持ってかれて・・・こいつもこいつ自身で、『半人間・半グリード』になりやがった』

「「「「「・・・はぁ？」」」」」

ギルの言葉は、あまりにも衝撃的だった。

『二度は言わない。こいつの魂の中には俺のコアが九枚全部入ってやがる・・・だから、手足頭が欠損しようが、【人間としてのあらゆる欲望】が自動的にセルメダルになって再び構成する。まぁ、実質上の不死だな。死んでもコアがあれば復活するし、コア自体も欲望さえあれば今のこいつの魔力とこいつの姉の魔力を全部ぶつけても壊れねぇ。晴れて人外の仲間入りだな、ニノ・スプリングフィールド』

その言葉はあまりにも残酷で、自分が一瞬解らなくなった・・・

―ダッ

「ッ！ニノ！」

―ニノＳｉｄｅ．ｅｎｄ

：

：

：

：

—三人称Ｓｉｄｅ

「ちょっとアンタ！仮にもアンタは・・・・！」
『解ってるさ。だからこそだ』
「え・・・？」

アーニャがギルに掴みかかる。
しかし、ギルはいたって冷静に答える。

『いずれ知らなきゃいけない事実だ。あいつの欲望が無けりゃ、今あいつは生きてないし、俺もここに居ない。だからこそ、知らないまま成長して、あとからウジウジされちゃ半身でもある俺が困る。今あいつは少し混乱してるだけだ…それに、あいつの姉も居るんだ。これで立ち直らなかったらお前が殴って直せ』
「・・・うん」

無理矢理かもしれない。
だが、戻る方法は現状では皆無に等しい。
だから否が応でも、この現状を知らなければならない。
『リスクの先にこそメリットはある』
その考えは奇しくも、まだ先の未来に生徒となる一人の吸血鬼と同じ考えであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アイキャッチA

ニノ「超無欲魔法先生ニノら！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・

アイキャッチB

ネギ「超無欲魔法先生ニノら！？　ニノのお姉ちゃん、ネギです♪」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜ウェールズ・小高い丘

夕日に染まるウェールズの町並みが見える小高い丘。
ネギが走って辿り着くと、丘の先でニノはどっかりと座っていた。

「ニノ・・・」
「・・・姉さん」

ネギが話か掛けると、ニノは重い口を開けた。
ネギはゆっくりとニノの隣に座る。

「姉さんは・・・」
「うん？」
「姉さんは怖くないの？僕が、半分化け物だなんて・・・」
「全然だよ」
「本当？」
「うん、本当。僕はニノのお姉ちゃんなんだよ？それに残りの半分はニノのままだし、グリードである半分は『新しいニノ』として接していけばいい。どちらにしろ、全部ひっくるめて僕の弟の『ニノ』なんだから、怖いものは何も無い。むしろ頼もしいくらいだよ」

ニノからの問いに、ネギは笑顔で返す。
そしてネギは、ゆっくりとニノの頭を抱きかかえる。

「僕達がお母さんを知った日、僕らは言ったよね？『僕らは、二人で一人の魔法使いだ』って」
「うん・・・」
「ニノの悲しみは僕の悲しみ、僕の『嬉しい』はニノの『嬉しい』なんだ。僕らは二人で一人。補い支え合う姉弟なんだよ？ほら、心配ないない♪」
「・・・う、ん…」

頷くニノの声は徐々に震えていく。
それに合わせるようにネギの手はニノの頭を撫でる。

夕日に染まる小高い丘に、静かに、ゆっくりと、小さな慟哭が鳴ったのだった・・・

～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ＥＤ：ＦＯＲ　ＴＨＥ　ＤＲＥＡＭ（ビーストウォーズＥＤ）

ニノ「うう、まさか泣いてしまうとはね…不覚だ」
ネギ「そう言わないで。泣いた後はパーっと笑えば良いよ！」
ニノ「簡単に言うねぇ・・・」
ネギ「ま、あとはエンディングの後だよ！」

第欲話　説明と右腕とGの証／姉さん・・・僕は人間をやめたようです（後書き）

・・・はい、アイキャッチの参考は『超ロボット生命体トランスフォーマーマイクロン伝説』のアイキャッチを参考にしています。
ＥＤはビーストウォーズから。番外編は『ＦＯＲ　ＴＨＥ　ＤＲＥＡＭ』を、本編では『パ・ピ・プ・ペ　ビーストウォーズ』を想像してください。

では、次回予告をニノどうぞ！

ニノ「最近フィリップぽくなって口調が難しいニノだよ。
作者は物作りというかガンプラが得意というわけでもないけど好きなんだよ。
ペン入れもしないでそのまんまでね。
おっと、そろそろ時間のようだね。
次回、『キンクリと魔法学校とＮの開発／魔道具販売、始めました』見てくれよ？」

ネギ「なんなら僕の胸でさらに泣く？」
ニノ「姉さんは何を考えているんだい？」
ネギ「何って・・・なんだろ？」
ニノ「まったくもって知らなくて良いし、知りたくもないよ！」

第三話　キンクリと魔法学校とNの開発？／魔道具販売、始めました（前書き）

今回は一括。
短いです。

第三話　キンクリと魔法学校とNの開発？／魔道具販売、始めました

―ニノSide

村襲撃事件から二年が経った。
僕ら姉弟はネカネ姉さんやアーシャと共にウェールズへ向かい、祖父代わりの魔法学校の校長によって僕らは魔法学校へ入学。
無論、教師の中には『英雄の息子』として扱う奴らもいた。
しかし、校長（プライベートではお爺様）はその教師達を説得――それを認めない輩も居たけど、そこは僕が『おはなし』したのさ――してもらい、僕ら姉弟は平和な学校生活を送っている。

ああ、そうだ。僕自身にも色々進展はあったんだ。
僕はね、自分のＮＰＣから日本のアニメを見て衝撃を受けたんだ・・・
そう、彼らは僕ら魔法使いを簡単に凌駕するような能力を考え付き、それをアニメとして放映しているんだ！

ＦＦにＤＱ、ＤＢにドラ○もん・・・一般のゲームや子供向けの番組でさえ魔法使いを軽く凌駕する。
特に興味深かったのは「魔法少女リリ○ルなのは」、「魔法少女ま○か☆マギカ」・・・そしてなにより、「ＦＦ：Ｕ」というアニメだ。
「ＦＦ：Ｕ」では実際にある色素の弾丸を使って「召喚獣」というのを発現させた。
一応魔法でも精霊などを召喚する術式があるため、実現は可能に思えた二年前の夏・・・

〜〜二年前・夏・・メルディアナ魔法学校「ニノ・スプリングフィールド自室」〜〜

「ニィーノー！まぁーだぁー！？」

「できたぁぁぁぁぁぁ！！」

ネギ姉さんの昼食の誘いが来ているがそんなことは関係ないさ！

いよいよ「ＦＦ：Ｕ」の形状弾丸「ソイル」の試作型魔法色彩弾丸・・・

正式名称「魔式色彩型弾丸」・・・通称…まだ決めてなかったね（汗

さて、これに『魔法の矢』一本分の魔力を・・・あ

―カッ！

――ドォォォォォォォォォォンンンンンンンンンンンンンン！！！！

――――――――終

しかし、魔力を注いだら爆発なんて漫画みたいな失敗があったなん

てね・・・
そして、その原因を突き止め、試作二号機が完成したのは一年後・・・つまり一年前の春だ。

〜〜一年前・春・・メルディアナ魔法学校「ニノ・スプリングフィールド自室」〜〜

「ニノも飽きないわね〜・・・」
「僕もニノも凝り性だから（汗」

アーニャや姉さんが何か言ってるけど気にしないさ！
いよいよ試作二号機が完成した・・・
今度こそ！

「いっけぇぇぇぇ！！・・・あ、やっぱむｒ」

——ドオオオオオオオオオオンンンンンンンンンンンンンン！！！！

————————終

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アイキャッチA

ギル『超無欲魔法先生ニノら！？　腕のプテラ羽は飾りだ！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

アイキャッチB

ネギ「超無欲魔法先生ニノら！？　朝ごはんはしっかり食べよう！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

今度はソイルの構成物質と魔力が反発しあっての爆発・・・
それに今回は本当に死ぬかと思った・・・（汗
そして現在・・・

――――――現在・冬・・・メルディアナ魔法学校「ニノ・スプリングフィールドの自室・・・と言う名の研究室」

―ネギＳｉｄｅ

ニノが研究を続けて二年が経ちました。
ここまでで爆発すること３７８回、異臭が部屋から滲み出ること２４５回、ニノが死に掛けること４８５回・・・
いくらコアメダルの恩恵があるからって無茶しすぎなんだよ・・・
心配するこっちに身にもなってよ。

・・・と、言いつつ魔法学校の廊下を歩く僕。
目的・・・らしい目的はないんだけど、お弁当一緒に食べようかなって思ってね。
だって、ニノ・・・朝はパン一切れしか食べてないんだ。
だから今頃お腹空いてるだろうな、って。

・・・・・んで、ニノの部屋に着いたんだけど、ドアがみんなと違ってニノ特製のオリハルコンドアなんだよね。一ヶ所だけ物々しい感じ・・・（汗

―コンコン

「ニノー、お姉ちゃんだよー」
『あー、姉さん。ちょっと待って、今最終テストが終わるから待ってて』
「・・・二年前も一年前もその言葉の度に爆発してたような…（ボソッ」
『そう言うな小娘。日本という島国には【三度目の正直】という諺

があるのだ。安心しろ』
「ギル・・・」
紫の浮遊する鋭い右腕・・・『グリードのギル』が僕を宥める。
三度目の正直か・・・いい言葉だなぁ。

『まぁ、【二度ある事は三度ある】とも言うがな』
「・・・上げて落とすような言葉吐かないでくれる？」
『【仏の顔は三度まで】とも言うしな。これぐらいにしておこう』
クックッと笑うギル。
まぁ、ギルがいつも飄々としてるのはいつもだし。

「それで？ニノの調子はどう？」
『ああ。問題点は粗方片付けて、今度こそ完成のはずだ』
「そうなんだ」
僕はそのままその場に座り、ニノを待つ。
『おお、そうだ。姉よ。一つ聞きたい』
「ん？何？」
そのギルの問いに、僕は大きな衝撃を受けることとなる。

『ニノとは【仮契約(パクティオー)】とやらをしないのか？』

「ぶっ！！？」

『いやな？姉弟共に仲が良く、姉も好意を抱いて、ニノも良く懐いている。

これ以上に無い条件ではないか。

・・・まぁ、本音を言えばどんなマジックアイテム…いや、アーティファクトが出るかが気になるだけだが』

「ぶっちゃけちゃってる！？そ、それにニノと仮契約だなんて・・・・

あの、その・・・／／／」

『何、直ぐとは言わんさ。卒業して、その褒美としてだな・・・』

「ご褒美・・・」

←ネギの妄想

「ニノ、卒業おめでとう！」

「うん。姉さんもね」

僕とニノの足下に仮契約用の魔方陣が現れる。

「卒業の・・・ご褒美！」

「んむっ！？」

―妄想終了

「・・・な～～んて、そんな、恥ずかしい！／／／」

『なんという百面相・・・』

なんか呆れられてる気がする・・・

～～～数十分後～～～

ギルが僕の肩で寝て、僕は借りてきた本を読んでるときに、それは起きた。

『でぇぇぇぇえええええええええええええええええきぃぃぃぃいいいいいいいいいいいいいいいいいいいたぁぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！』

奇声を上げながらドアを飛び出してきたニノ。
ニノ、キャラ崩れてる。

「姉さんついに出来たよ！正式名称「魔式色彩型弾丸」・・・通称・・・『マジックソイル』！それがついに完成したんだよ！紆余曲折あったけど今は過去！量産こそは出来ないけどなかなかの専用機(ワンオフき)になったよ！！」
「わ、わかった。わかったから落ち着いてよニノ！！」

〜〜少年沈静中〜〜

「落ち着いた？」
「うん、今までに無いくらい落ち着いてるよ」
『（そりゃあ、覚えたての【魔法の矢】、【白き雷】、【深緑の烈風】を3セットで叩き込むコンボを送ったんだ。否が応でも落ち着きたくもなるさ）』

まったく、ニノってば乱暴なんだもんな・・・

「それで？マジックソイルってどういうのなの？」
「ふっふっふ・・・それはこれさ！」

ニノが取り出したのは三個の弾丸。
金色の弾頭と弾底、弾身の部分にはそれぞれ黒い砂、水色の砂、赤い砂が入っていた。

「この砂らしいものは魔力さ。黒は『闇』、水色は『氷』、赤は『火』だよ。これを、専用の魔法銃『魔銃（まがん）』に装填することで、マジックソイルに込めた『魔法の矢一本分の魔力』が中級魔法まで扱えるようになるんだ！

・・・まぁ、魔力の反動はどうにも消せなかったから、扱えるのは僕か姉さん、魔力と対相殺するほどの生体エネルギー『気』の持ち主ぐらいかな」

『魔法の矢一本分』で！？

すごいな、ニノ・・・

「じゃあ、他の属性のも作れるの？」

「無論だよ。この『マジックソイル・ブランク』に魔法の矢を使って、『装填』って詠唱、または無詠唱すればいいから」

再びニノが取り出したのはさっきと同じだが、弾身の砂が無く、空洞になっている。

「まぁ、詳しい話は後さ。

さ、早くご飯を食べよう。僕のお腹はそろそろ限界だ」

「・・・ふふっ。はいはい。ほら、ギルも早く行こう！」

『そう急かさないでくれ。今行く』

この日から数日後。

簡単かつ高性能な魔道具を作って『まほネット』で売ることにした

ニノ。
『安くて使い易くて高性能、あなたの魔法の手助けに』のキャッチコピーと偽名で始めた商売・・・
『ニージ（ニノ）とネーグ（ネギ）の魔法商店』
不安ながらも意外と繁盛して、少し驚いている僕がいたり・・・（汗
・・・っと、ニノに呼ばれてるからここまで。

―ネギ・スプリングフィールドの日記から抜粋

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ED：『バ・ビ・ブ・べ　ビーストウォーズ』

ニノ「ギルって腕で浮遊してるんだったよね？」
ギル『ああ、そうだな。それが何だ？』
ニノ「学校内で普通に浮いてて大丈夫なの？」
ギル『それは・・・』
ニノ「それは？」
ギル『エンディングの後で教えてやる！』
ニノ「えー・・・」

第三話　キンクリと魔法学校とNの開発？／魔道具販売、始めました（後書き）

・・・はい、というわけでソイル完成です。
嗚呼、原作にＦＦ：Ｕを追加しなくては。

・・・では次回予告どうぞ！

ネギ「ネギです。
母との連絡で母がクーツンデレ、父がツンデレと知りました。
毎回通信の向こうの両親のやり取りが楽しくて堪りません。
録音しているのはニノとの秘密です。
次回、『卒業と来日とＹの気配／苦労が絶えない弟』
乞うご期待です」

ニノ「で、どうなの？」
ギル『それはだな。俺が周囲の水分を細かく凍らせて光の屈折を作って・・・』
ニノ「ゴメン、もういいよ」

第四話　卒業と来日とYの気配／苦労が絶えない弟（Aパート）（前書き）

ついに卒業だぜ！

第四話　卒業と来日とYの気配／苦労が絶えない弟（Aパート）

―ネギSide
～～メルディアナ魔法学校・聖堂～～

どうも皆さん、ネギです。
今日で僕やニノ、アーニャ・・・他の同期の生徒と共に卒業です。
入学から、様々なことがありました。

筆記と実技で僕とニノがワンツーフィニッシュしたり。
新しい魔法を覚えたり、創ったり。
ニノが爆発したり、臭くなったり、セルメダルに埋もれたり。
アーニャがお菓子作りで爆発したり、僕が生クリームぶちまけたり。
ギルがパンを主食にしたり。
ニノと僕が退屈凌ぎにおじいちゃん校長の部屋にくしゃみが止まらない『エターナルくしゃみくん』（液体）を仕掛けたり。

とても楽しい日々だったなぁ・・・

「ネギ・スプリングフィールド！」
「っ、はい！」

ついに呼ばれた。
うう、緊張するなぁ・・・

「（姉さん頑張って！）」
「（落ち着きなさいよネギ！）」

「「「（（（頑張ってくださいネギさん！！）））」」」

ニノにアーニャ、僕を慕ってくれたみんなからの激励の小声が聞こえてくる。
えへへ・・・なんだか照れるなぁ。

「（なかなか慕われているようじゃの。結構結構！）卒業証書授与。この三年間よく頑張ってきた。だが、これからの修業が本番だ…気を抜くでないぞ？」

「はいっ！！」

小声で褒めてくれたおじいちゃん校長。
僕はおじいちゃん校長の言葉に答えるために元気に声を張り上げた。

入学してから三年。
僕の容姿もだんだん変わってきた。
父さんと同じ赤みがかった茶髪は肩甲骨まで伸びて、黒髪の部分が腰まで伸びました。
でも、それ以外に変化は無いんだよね。
胸だって・・・うう。

「ニノ・スプリングフィールド！！」
「はい！」

あ、今度はニノだ。
ニノ、ガンバレー！

―ニノSide

姉さんから妙な思念を感じる弟。ニノです。
さてさて、僕の番だね。

「（頑張りなさい。ま、アンタなら平気でしょうけど）」

最近、アーニャの僕の扱いが雑だね・・・（汗

「「「（（（（応援してます！総帥！））））」」」

キミ達も相変わらずだね・・・（苦笑
ちなみに今のは僕や姉さんを慕う軍団、『スプリングフィールド姉弟を慕い隊』という軍団だ。
僕のことを何故か『総帥』と呼び、姉さんを『ネギさん』と呼ぶ。
筆記と実技、姉さんと共に自重すべきだったかな？（汗

『（お前の緊張した姿なんてそうそう見られないからな。じっくり観察させてもらうぜ・・・ククッ）』

ギル、後で覚悟しておきなよ・・・
因みにギルは今回は僕の右腕に憑依している。
僕が気絶、就寝、許可しない限りはギルに体の主導権は訪れない。

『（おお、怖い怖い）』

黙っとけ。

「（お主もなかなか慕われているな）卒業証書授与。
この三年間よく頑張ってきた。だが、これからの修業が本番だ…しかし、お主ならば問題ないだろうて」

楽しそうにニヤニヤと笑う校長。
それに、過度な期待は禁物だよ？
そうそう、僕の容姿にも変化はあったよ。

髪はプトティラを手に入れたときから変わらない毛先紫の腰までである金髪。
身長は９歳男児平均身長より少し高め・・・ネギ姉さんの身長より３ｃｍ差で高いね。
姉さんは女の子の中では少し高めで、アーニャもそうだ。
まぁ、二人とも女性的特徴は・・・

「「（（ニノ、あとで少し話が・・・））」」

残念、その依頼は却下だ。

‥

‥

‥

‥

〜〜メルディアナ魔法学校・廊下〜〜

「せーの・・・」

「「「「卒業おめでとーっ！！」」」」

ニノ、ネギ、アーニャ、ネカネは廊下という場所にもかかわらず、大声で祝い合っていた。

「ほら、早速卒業証書の修行場所を見ましょ！ちなみに私はロンドンで占い師よ」

「へぇ、ロンドンは良い街らしいからね。頑張ってねアーニャ」

「へへへ・・・もっちろん！　それで？二人はどうなのよ」

「うん。ちょっと待って今浮かび上がるから・・・」
ネギはそう言って卒業証書を見る。
ニノも同様だ。
「何々？」
「えーっと・・・」
「「日本で教師をすること？」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・。

「「「「ええええええええええええええええええええええええええ
えええええええっっっ！！！」」」」

廊下に、大きく騒がしい声が響き渡ったのだった。

～～～

第四話　卒業と来日とＹの気配／苦労が絶えない弟（Ａパート）（後書き）

次回、いよいよ麻帆良へ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7052t/

超無欲魔法先生ニノら！？

2011年6月12日08時15分発行